「愛の血液助け合い運動」月間（7/1～7/31）に因んで

沖縄県理学療法士会理事（事業対策局局長）
医療法人アガペ会　ファミリークリニックきたなかぐすく 理学療法士　宮里　朝康

過去２年の「愛の血液助け合い運動」月間の行事お知らせコーナーを拝読させて頂きました。一昨年、沖縄県赤十字血液センター所長からは、沖縄県の血液事業の組織的取り組みがなされている現状と、血液製剤を安定的に確保する需給調整の状況が報告され、昨年は、医師の立場から、医療現場最前線での救命・延命治療時の血液製剤の取り扱いについて、細心の注意を払って使用し、保管・管理している状況などの報告がありました。さて、この流れから行くと、今年は、献血をする側からの報告となりますから、多くの団体が献血推進活動を行っている中、恐縮ではありますが、沖縄県理学療法士会の献血推進の取り組み状況と今後の展開について報告させて頂きたいと思います。

毎日のように新聞・ラジオで、献血協力の呼び掛けが行われておりますが、皆さんはどう受け止めていますか。献血は、健康的な生活を送っている方であれば、200ml献血だと16歳から69歳まで、男女18歳・男45kg、女40kg以上あれば成分献血が出来るようになり、男女体重50kg以上からは400ml献血もできるようになります。しかし、献血に来た全ての方が実施出来るものではなく、献血者の健康と輸血を受けられる方の安全性を高めるために様々な基準が設けられています。

私は、年３回400ml献血する月を決めています。決めることになってしまいました、が正しいかもしれません。それは、沖縄県理学療法士会で、７月・11月・２月と年３回の献血強化月間を設定しており、その担当者が私だからです！。今となってはライフワークの一つとして献血カードの回数が増えていくのも楽しみにしています。

赤十字血液センターホームページに以下のような言葉が綴られています。“白血病も治せるようになりました。しかし、治療する過程では必ず輸血が必要です。献血で助ける命がある。助かる命があります。”皆さんも勇気を出して献血ルームに足を運んで見ませんか。

さて、沖縄県理学療法士会の献血推進事業も５年目を迎えましたが、会員への周知と献血ルームに足を向ける動機付けがうまく行かず、数字が伸びないのが現状です。強化月間の開催方法もひと工夫が必要ということが分かってきて、学術大会やイベントに合わせて移動献血車を配置すると、受付者が多くなる傾向が見られました。新入会員のオリエンテーションでは、沖縄県赤十字血液センターから発行して頂いた『献血紹介カード』を配布し、協力を呼びかけています。

私たち理学療法士が現場で関わる為には、まず、急性期での生命の危機を脱し、病状を安定させ、体力・健康を取り戻して頂けなければなりません。私たちが関わることができない領域（救命・延命の医療現場）でも関わることができないか。理学療法士は身体に触れ、体を通して心に触れ対象者を回復させていきます。これだけではなく、身体の中からも元気にすることが出来るのではないか。理学療法の場に来て頂ける為に、理学療法士会ができる社会貢献の一つとして、献血推進事業をスタートさせました。

血液事業の展望の中で危惧されていることが、迫り来る少子高齢化時代の中で、血液事業

をどう支えていくかと言う事で、今後の仕組み作りの必要性を感じ、多くの方々が尽力されています。沖縄県理学療法士会の取り組みは、今は点としての活動で、それが少し大きくなっているものの需給状況を好転させるまでには程遠い状況です。

団体毎の活動ではなく、組織的な取り組みに変えていく『点から線、線から社会全体で支える面へ取り組み』への発想です。この発想の展開（夢）を以下に述べてみたいと思います。

～献血推進ゆいま～るプロジェクト～

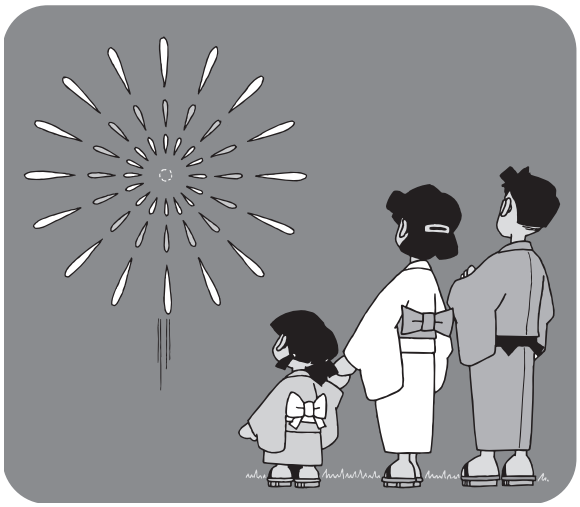
このプロジェクトは、まず、県民の命を預かる医療従事者でスタートさせたい。沖縄には、17の医療保健関連の団体で構成されている沖縄県医療保健連合（なごみ会）があり、県民の健康推進等に寄与することを目的に活動している組織があります。この構成団体で1年12ヶ月を献血推進月間として埋め、スタートさせる。献血推進月間の団体は、次の団体へ意志を繋ぎバトンタッチして行く。一度回り始めたら永遠に回り続ける。各団体が、このプロジェクトに参加することで、『点が線』となり、各団体の構成員が組織的献血という輪の中に自分達の団体があることを確認し、県民の救命・延命に関わっているのだという役割を認識することが期待できると思います。

次に、社会全体で支える『面』への取り組みとしては、スタートさせた『献血推進ゆいま～るプロジェクト』の趣旨に賛同して頂いた全ての団体・会社・個人にも役割を担ってもらい、徐々に広げ、幅広い年齢層で支えることが出来れば、社会全体で支える『面』が出来ると思います。

理想とする社会としては、新聞・ラジオからは、血液不足の広報が無くなり献血月間となっている団体・会社・個人の名称が紹介される。いつでも十分な血液が確保され、救命率が上がり、安心して生活できる社会になるという状況です。

少し欲張りますが、この活動を沖縄だけに留めることなく、各団体の上部団体に広げ、九州・全国・世界へと献血の輪を沖縄から発信することが出来ればと思います。

この『献血推進ゆいま～るプロジェクト』は、この寄稿文が掲載される7月の、「愛の血液助け合い運動」月間からスタートを切れるように調整を進めております。

沖縄県理学療法士会は、今後も微力ではありますが、社会貢献の一つとして献血推進に努めて行きたいと思います。皆様のご指導・ご協力よろしくお願いします。

最後に、このような機会を与えて下さいました、沖縄県医師会広報担当理事 當銘正彦様に感謝申し上げます。